大原富枝

ひとつの青春

ひとつの青春

大原富枝

大原富枝●ひとつの青春

昭和49年6月10日　発行
定価　980円

著者　大原富枝
発行者　藤山真人
発行所　株式会社　東邦出版社
東京都新宿区戸塚一ノ三五四
電話東京(二〇二)七六三一～三
振替東京八五二七五

印刷・日大印刷　製本・美成社

ひとつの青春　目次

ひとつの青春

一、堀詰松淵町……7
二、帯屋町「ひろめ屋敷」……43
三、一九三二年の春……87
四、「青春」……111
五、「ダッタン海峡」……133

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

海燕

序章……185
一、昼のゆめ……194
二、牢獄と戦場と……238
三、羽搏き嗣ぐもの……264
あとがき……275

ひとつの青春

一、堀詰松淵町

堀詰はそのころ高知の街でいちばんの盛り場であった。

「新開地」とよぶ、映画館や射的屋などのごたごたしているところを堀詰へぬけて、堀にそって南の方へ、鏡川のつつみにつきあたる松淵町の通りは、小料理屋やのみやが軒をならべてにぎわう活気のある町で、一種の私娼窟でもあった。

昭和五、六年ごろ、高知の町ぜんたいが城下町らしいおちつきと情緒をもっていたころは、堀詰の町の灯がうつってここの夜空はばらいろにそまっていた。

――電車がチンチンとうたいながら堺町の方へさってゆく。あげ潮のときはどぶ泥のくさった臭いと磯の香とが、かすかにまじりあって風のぐあいで鼻にくる。

使者屋橋の手前からながめる牡蠣船の屋形の軒に紅ぢょうちんが灯っていて、そのほのぐらい灯影や、新京橋の赤玉ポートワインのネオンの明滅がとどきかねる堀の水路のはじに、船ばたひたひたに満たしたおわい船がしずかにもやっている。

昭和六年の冬、この松淵には「プロレタリア作家同盟」高知支部の事務所があった。

絣の着物のふところ手姿で、林田豊人はこの町を歩いていた。

彼が母とすんでいる帯屋町から松淵へでるには「新開地」をぬけるのが近道だ。せまい通

路をはさんでにぎやかに店が並び、そのあいだに撞球や射的などの遊戯場もある。迷路のように屈折しているそこを、彼は、遠くからでも一目でわかる歩き方でいつもうつむきこんで、なにか考えながら通りぬけた。右足をひきつけるような、小刻みの歩き方である。

ときには彼が反対がわから京町、新京橋をわたり、喫茶店やカフェーの多い「美人小路」をぬけてくることもある。

新京橋ぎわの世界館は洋画専門館で、そこの絵かんばんをかいている三波は、「プロレタリア文化連盟」のなかの「美術家同盟」にぞくしている絵かきであった。

だからそこを通るときは豊人も顔をあげて看板をながめた。今週はできがいいな、と思って足をとめて眺めることもある。「西部戦線異状なし」や「ラヴ・パレード」「モロッコ」など、すぐれた洋画がはいってきた。「巴里の屋根の下」「間諜X27」もやはりそこにかかった。作家同盟の仲間たちは、ときどき三波の顔でロハで見せてもらうことができた。

「美人小路」をぬけてきた吉岡のブロマイド屋の軒さきに、金髪のディトリッヒが腰をひねって美しい脚をみせ、霧(きら)ったようなまどわしのまなざしでこっちを見ている。

夜はあけがた近くまでひやかし客たちのよいどれた大ごえや、女たちの嬌声がざわざわともやのようにたちこめているこの町も、昼間はねぼけたように色あせた町である。

ひるすぎにおきだした女たちは湯道具をかかえて銭湯へでかけ、首にねりおしろいをぬってかえってくる。やがて片肌ぬぎで化粧する彼女たちの姿が店みせの二階の窓にみえかくれする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

作家同盟の事務所は、松淵もはずれの方で片町に近かったが、やはりそういう空気のなかにあった。

この種の職業の女たち特有の蒼ぐろくよどんだ顔色が、化粧につれてたちまち華やいだ顔につくりかえられてゆくのを、無関心なふりをしながら内心つよい好奇心で彼等はすばやくぬすみ見る。

女たちの方は、向うはずれのしもた家の二階に、学生もまじってなにをするのかいつもたむろしている青っぽい若者たちの眼など完全に無視して、忙しそうに化粧し、着がえをし、高ごえで返事しながら階段を音たててかけおりてゆく。

この松淵の家はもともとは、兄の家をおんでてきた佐伯夫婦がとりあえず借りたものであった。若い夫婦は、住んでみるまでこの家がこのような特殊な町のはずれにあることを知らなかった。

佐伯の父は、この街では有名な奇人肌の教育者で、彼は父の創設した中学で国語と英語の教師をしていた。父はもう亡く、長兄がついでいるうちの学校に、左翼の運動にはいった彼をおいておくことはできない、といわれ、彼自身もまわりに反撥しておんでてきた。

この家から道はもう二三軒で鏡川のたかいつつみにつきあたる。土手にたいして片町がひっそりと家なみをつらねている。土手の上には小径がとおっていて、そこから片町へ下りる石段がかなり急な傾斜でついている。

堤のうえの小径を豊人は歩いてきた。このみちはいつも川から吹きあげる風に、小さい草

たちまで吹きなびいている。しかし草むらには冬でもたんぽぽやさぎごけのかれんな花が咲いているのだった。

石段のそでには、少しばかりたいらにたがやされて葱があおあおと芽をのばしている。青葱には雑草のもたない野菜の威厳のようなものがある。豊人は野菜というもののどこかしっかりしたものに感動することがあった。

冬らしくないあたたかな雨があがった。石段をおりながら豊人は土手ぜんたいからやわらかく水蒸気がたちのぼっているのをながめた。風かげにはなずなやはこべも萌えている。ふっくりした雨あがりのもつやさしさが、モーツァルトの即興曲をきくのににたおもいで彼をとらえた。

――ついこのごろ、彼は「日本共産青年同盟」支部の組織にくわわった。

「共青」と彼等がよぶそれは、もちろん非合法である。彼がいつもある緊張のなかにいるのは事実であった。「共青」のメンバーになったことで、党員であるのとほとんど同様な運命がじっさいに彼等をまっていた。

彼等の高知支部の組織は、何度にもわたってほとんど壊滅するような弾圧をうけたあとであった。いま、自分たちの手によってほそぼそとながらうけつがれ、守られようとしているのは、「党そのもの」なのだ、と若い彼等は気負って考えている。それはたしかにそうなのでもあった。だから、いつも危険をおかしているのだ、という意識からのがれられない。

松淵の事務所にはときどき特高の刑事や憲兵たちがあそびにやってきた。招かれない客で

あることを十分知っている彼等は、特有のずぶとい笑顔でのっそりとはいってくる。
「どうぜよ、元気かよ……」
それは彼等にとってはいつもきまってふいの出現に思われるのだった。
片町の通りにおりたとき、豊人はもう注意ぶかい眼くばりになっていた。ふと彼は自分のうえにそそがれているにちがいない凝視を感じて、さッと眼をあげた。——すると、二階の窓からじっと見おろしている佐伯の眼とぶっつかった。
佐伯は同時にしろい歯を見せた。
——あいつ、どうしてあっちの方からやってくるんだろう、とそう思って彼は土手を歩いてくる豊人のくせのある歩きぶりをながめていたのだ。ああ、そうだ、あいつ、どこかのアジトからやってきたんだな、そう思ったとき、豊人がするどく眼をあげたのだ。
豊人の眼のなかに羞かみのいろがひろがってゆくのがわかった。佐伯の思いが反射的に彼にもわかったのだ。
佐伯の家は階下が土間と台所になっている。豊人がだまって土間にはいってゆくと、細君の文枝がおくからのぞいて、にっと力をこめた笑い方をした。
「林田さん、ちょっと、これ見て！」
期待にはずんだあかるい顔で、文枝は自分の後を指さしていた。そこの台所の板の間に、米俵が一つすえられている。新しいわらのにおいがあまく鼻にくる。
「どうお？　ごうせいなもんでしょっ」

文枝は誇らしげにいった。明るい眼がかげのない喜びにかがやいている。
豊人はわずかに唇をほころばせ、俵に手をかけてちょっと押してみた。びくともしない。ずっしりとした快い穀つぶの手応えがあった。
――なんともゆたかな心地だ、これが必要なんだな、人間というやつにはな、と彼は思った。
「……さとの兄が寄附してくれたの、これで当分は安心よね」
「ふーん……」
豊人は鼻の上にしわのような笑いを見せた。
「小野さんいうたらねえ、ポンポン柏手うっておがんだのよ、ふふ……」
豊人は笑みをふくんだまま、二階へあがっていった。
彼がなにもいわなくても、文枝は十分満足していた。仲間としての彼を、彼女なりに理解している。豊人の方も、気のいいところのある彼女をきらいではない。極端に無口な彼が、この家にいるあいだによく話すのは彼女であり、彼女のためにしゃべることが一番多いのである。
従兄の佐伯悠久と結婚した文枝は、運動にはいった夫についてここに引越してきてから、いきなりどん底の貧乏ぐらしにおちて当惑していた。物のゆたかにある百姓の家庭でそだった彼女には、米の一升買いや、木炭の十銭買いなどというのは、非常に恥ずかしいことに思われる。泣きべそをかいていると、佐伯がかわりにかごをもってでかけた。

一升買いの金もないときは、佐伯は兄の家へ米をとりにいった。ぶらっとでかけていって老母と話したりしながら、台所のあたりに人のいなくなるときを見すましている。

ところがある日、彼は米をとりだしている最中を嫂に見つかってしまった。彼女とは日ごろからそりのあわない仲でもあったのだ。

「まあっ、悠久さん、あんたなにをしよるのよッ」

嫂は叫ぶようにいった。

自分のうちじゃないか、なにを恥じることがある。むしろ堂々と盗んでやるべきなんだ、とかねてから彼は考えていた。

にもかかわらず、このとき彼は首まで赧くなってしまった。情けないことに彼自身の生理が彼を裏切ったのだ。まさしくへっぴり腰の泥棒にちがいない、自分の姿勢が彼を辱しめた。

――なんてまた大げさな、下品きわまるこえをだしやがる女だ！

嫂のおどろいて咎めたその叫びごえにまで、彼ははげしい憎しみを感じた。

――彼の口惜しがりようを、作家同盟の仲間たちはみんなうれしがって大笑いした。そんなやりくり算段の彼の家で、仲間たちはちょいちょい中食だの夕食だの食ってゆくのである。

二階では瀬戸の火鉢をかこんで、河北や増田などが佐伯と話していた。

「おい、見たか、林田……米屋のシンパができたぞっ、あの母なる大地のめぐみ、ええじゃないか」

河北は陽気に話しかけた。
豊人はうん、と口のなかでいってその陽気さにはのってゆかないこたえようをしていた。身体をすこしずらしてくれた佐伯の横にすわりながら、おれはまた気むずかしくなってるな、と彼は自分を意識した。
河北は高知高等学校の学生で、秀才であった。彼のことをいうとき、――あいつ、要領のいいやつだからな、と誰もがまずいうのだった。そういわれるのにぴったりしたものが彼にあった。
まったく、あいつの秀才は、その秀才さがすでに要領がいいんだからな、と豊人も思う。彼が自分たちの仲間にいるということに、あるまやかしに似たものを敏感に感じている。
河北のあたまの回転のはやさは自分の軽薄さをはっきり意識していて、他人の批判より前に自分で批判している。他人の軽蔑よりさきに自ら自分を軽蔑することで、もっとも自尊的なのである。
彼はいつも楽天的に喜劇的にふるまう。それがかえって装われたものに見え、なにかを韜晦しているように受けとられる。……いや、そう受けとらせるものがあるのだ。
豊人は、彼自身も意識的に軽薄にふるまうときがあるのだが、河北のなかにあるこのような意識のからくりが癇にさわるのである。
河北はいま女性のことで悩んでいた。結婚しなければならない事態に追いこまれていたが、彼にはその気持はないのだった。豊人は他人の私生活にはふれまいとしている一方で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.